

高大「教育接続」が支える高等教育の 拡大と発展—Connect to College Success

田中 義郎

(桜美林大学 総合研究機構長・大学院教授)

一 何と何を繋ぐのか—今日的課題としての高大「教育接続」

「教育接続」と言うが、何と何を繋ぐのか。平成一五年に始まった特色G P以降、現代G P、質の高い大学教育推進プログラム、大学教育推進プログラム等の申請内容を見ても、高大の「教育接続」に毎年、一定数の関心が寄せられており、わが国の大学にとって重要な努力課題であることが分かる。

また、この課題は、高等教育が大衆化、ユニバーサル化の段階に達した諸外国においては既に重要な課題となっており、わが国固有の問題ではない。高等教育の量的拡大と

発展は、常にこの課題と共にあったとも言える。

アメリカでは、カレッジボード (College Board) が運用するアドバンスト・プレイスメントのプログラム (A P[®]) が良く知られている。A P[®]は、現在、アメリカ国内の他、世界二四カ国の高校で利用されている。アジアでは、最近、アメリカの大学教育への接続テストとして韓国で大いに利用されていることが報道され、その有効性が注目されている。

我が国でも、方策としてのアドバンスト・プレイスメント・プログラムに対する関心は徐々に拡大しつつある。例えば、学校法人立命館では、一貫教育推進本部を立ち上げ、

法人内高校はもちろん、法人外の高校、いわゆる提携関係にある高校との有機的な高大教育接続の試みを事業化してきている。

しかし、この場合、アメリカでカレッジボードが運営するAP[®]とは、基本的な考え方で参考にしてはいるが、立命館独自の事業となっている。一方、日本では、アメリカのカレッジボードが運営しE.T.S. (TOEFL, TOEIC)などの運営で知られるテスト機関)が実施しているアメリカの大学に直結するAP[®]テストに参加し、AP[®]コース認定を既に受けている高校は、現状では、インターナショナル・スクール等の国際学校やアメリカン・スクール等である。

また、立命館大学が「二〇〇五年度から始めた特別推薦入学枠」として紹介されている授業履修体験活動を組み込んだ高大連携(アドミッション)プログラムがある。立命館大学のみならず中央大学商学部、法政大学キャリアデザイン学部などいくつかの大学でも、優秀な高校生を確保するためのプログラムとして行われている。この場合は、高校生の大学教育への関心を喚起しつつ、積極的に志願者を確保する、新たなアドミッション戦略のひとつである。

二 高校教育と大学教育の関係―わが国の高校教育の目的

周知のとおり、学校教育法では、「高等学校は、中学校における教育の基礎の上に、心身の発達に応じて、高等普通教育及び専門教育を施すことを目的とする。」とされている。また、将来の進路を選択し、社会に出る準備段階にあることから、義務教育段階に比べてより幅広く専門的な教育を行うことが求められている。(普通教育…一般的・基礎的な知識・技能を修得させ、人間として調和のとれた育成を目指すための教育。専門教育…専門的な知識・技能を修得させる教育(農業、水産、工業、商業等)となつている。

この中から、高校教育と大学教育との接続を説明する文を見つければできない。さて、わが国の高等教育進学率は、二〇〇九年度で七八%に達した。この事実、明らかにこれまでの高校と大学との関係がそれぞれの目的に照らして変わる必要があることを前提としている。

三 その時、大学は・・・―選抜を緩め、志願者は増加した

わが国だけでなく、アメリカもまた、大学と高校の関係は近年明らかに変化した。その多くは需要と供給の関係の

変化に起因するものであるが、こうした大学と高校の関係の変化が単に大学入学という人口問題以外に派生したこととも事実である。学生募集戦略としての成功とは裏腹に、様々な課題を大学内に生じさせた。その変化の中で戦略的に成功した大学の方策がある。

彼らは、期待したとおりの志願者を得られたが、一方で、一八歳人口の減少は目に見えにくい危機を別途作り出した。志願者のあからさまな減少は見られなかったし、収入の面での減少もなかったが、実際、選抜基準が緩和された。ベビーブームの最盛期には、こうした大学の入学許可率は極めて低く、学生は激しく競争し入学を果たした。しかし、出生率の低下に呼応するように入学許可率は変化した。同時に、授業料は上昇し、実際、相対的に学力は若干劣るが、経済的に裕福な、ボーダーに居る生徒の家庭に以前より多くの大学進学の機会が与えられることとなった。そして、以前と同等、それ以上の成果を上げるために、教育プログラムの強化は必須となった。

こうした処方箋を駆使して成功した大学は、実際、活気に溢れている。一見、単なる経営問題のように思えるが、いずれも教育プログラムをどうするか、という問題である。つまり、大学、特に私立大学において、経営問題はすなわ

ち教育プログラムの問題であり、そこは大学が魅力を表現できる唯一の場所なのである。しかし、こうした大学でも新たなタイプの志願者に如何に対応するか、では未だに困惑しているところが多い。

四 「大学生になる」を準備するために「コグニテ

イブ・レディネスの形成

高等教育に関わる人たちにとって、学生を指導する過程で、高大の「教育接続」をどうするか、は日常的な話題である。その背景には、「高校生を如何に大学生にするか」が、問題の中心にある。こうした議論に長い歴史を持つアメリカの大学の話から始めてみることにする。高校生は、大学進学に際して、何を準備すべきかを知っているか。

一九六九年春、ニューヨーク市立大学は、一九七〇年秋の入学者よりオープン・アドミッションとする、すなわち、高校卒業などの基本的条件を満たしていれば、誰にでも大学入学の機会を与えると発表した。長年にわたる高等教育進学機会の公平性を巡る人種間対立のひとつの結論であり、同時に、それは、非伝統的学生の高等教育への準備に関する長い議論の始まりでもあった。ニューヨーク市立大学におけるその後のオープン・アドミッションの成功は、大学進学準備をものは人任せにしない、ことにあった。そ

これは、ラガーディア・コミュニティ・カレッジ（選択制ハイスクール（高校）を組み込んだコミュニティ・カレッジ）であり、ここでは、短大の授業と高校の授業が学修できる）に代表されるミドル・カレッジの発明、すなわち縦の多様な創造によって成し遂げられた。

ここで言う非伝統的の学生とは、大学進学が当然のように予定されておらず、かつ高校段階での準備が十分に成されていない学生のことである。大学での成功を理解するには、大学進学に向けて高校でどのような準備がなされているかに精通する必要がある。大多数の親は、高校の大学進学準備のカリキュラムが子どもたちの実りある大学生生活の為に慎重にデザインされていると信じている。しかし、高校と大学は、必ずしも有機的な教育接続を前提に作られてはいない。それぞれの教育段階において獲得されるべき知識や技能の水準について語られる事はあっても、次の段階での成功に必要なとされる知識や技能について注意が払われることはない。その意味では、初中等教育と高等教育は互いに独立した存在である。歴史的に見て、発展の仕方もその目的も異なっている。こうした時代において、大学への進学者数はさほど多くはなかったし、志願者が限定されているという理由で、選抜が極端に厳しい大学も多くはなかった。

今日のように大学卒の資格が産業社会に出て行くためのパスポートという認識もなかった。

今日、小中学生に将来の進路を尋ねると、高等教育機関に進学することを否定する子どもたちにとどの程度出会うだろうか。国立教育統計センターによれば、アメリカでは九年生の九〇%以上が高等教育機関への進学を将来計画の中に組み込んでいるというデータがある。わが国でも、大多数の子どもたちにとって、高等教育への進学は既に現実的な選択肢となっている。

高等教育進学者の増大は、入学に際して、厳しい競争を生み出した。特に、皆の進学希望が集中する大学において顕著であった。わが国では、一九九二年には一八歳人口が二〇五万人となり、高等教育進学者希望者の増大も重なって、多くの大学で厳しい競争が発生した。

一九七〇年代以降、アメリカでは、高等教育の卒業証明書は、産業社会に入るための重要な資格と認定されるようになった。その結果、社会的成功を期待する高校生はこぞって大学を目指し、さらに、大学院を目指した。大学院の発展は、学士課程での学業成果に色濃く影響される大学院入学の可能性と相まって、高校生にとって大学での成功がますます重要になるという状況を作り出した。そして、入

学審査のために求められる条件もまた厳しくなっている。SATの成績のみならず、APテスト、GPA、学年順位、推薦状、課外活動実績などが主要な入学審査の判断基準となっている。

さて、大学入学後、彼らには何が起こるだろうか。最初の授業で、学生は何に直面するだろうか。大学の教員は学生と如何に接するだろうか。大学の教員は学生に何を望んでいるのだろうか。こうした質問はつい最近までほとんどなかったし、誰も答えもしなかった。

「良く準備ができている学生とは？」について大学は明言しないし、科目を履修する際の背景知識の有無について言及する程度である。ごく一般的な学習スキルや時間管理の重要性について言及するものの、最初の一年間をどのよう乗り切るかについてはほとんど教えてくれない。

実は、大切なのは、大学で成功するには、そのために、学生は何を知って何ができなければいけないのか、を理解していることである。入学審査はある程度のヒントを与えてくれるが、入学審査が狭義の成功しか示さないために、如何に入学審査で高得点を得た学生でも、入学後の学業で苦勞をすることは日常的に起こる。

高校の教師は、多様な仕組みの上に成り立っている大学

での成功のためにどのようにカリキュラムを舵取りすべきかを決めなければならぬ。彼らは、卒業生から情報を集めつつ、APやIB（インターナショナル・バカロレア）に代表される高次の教育接続プログラムを担当することで、科目において大学が期待している知識についてある程度目処を立てる事ができる。

アメリカの高校を例に取ると、少なくとも二種類のこうした努力を見ることができる。一つは、州立の総合大学への接続準備を念頭においたプログラムと、より選抜の厳しい、アイビリーグ大学などいわゆるエリートといわれる大学への接続準備を念頭においたプログラムである。わが国では、国公立系、私立文系、私立理系といった、アドミツション接続への戦略的工夫が見られこそすれ、大学教育へのプログラム接続に重きを置いた教育的工夫を見る事は少ない。

仮に、高校の教師が優秀で、適切な知識や技能の獲得を支援したとしても、高校教育で、大学四年間での成功を導く知的な思考技術を獲得することはそう簡単ではない。実は、知識や技能の獲得よりもこうした思考技術を身につけることのほうが遥かに大切である。こうした教育ができるかどうか準備教育の質を決めることになる。伝統的に高

校教育は積み上げ型であり、学びの形は、それ以前の学びの上に順次積み上げたものとなる。大学教育の学びの性質 (the Nature of Learning) を意識して意図的に調整されたものではない。確かにカレッジ・プレップと呼ばれる大学予科教育を提供する高校もあるが、現在の大学生の供給源となっている大多数の総合制高校では、大学の学びの性質に対応した教育がその目的の中に含まれていない。

五 高校教育と大学教育のスタンダードとベンチマー クの共同管理の必要性―高校教育の目的の再考

高校教育の目的は大学入学後の準備のためだけではない、と言う人たちがいる。高校は、高校教育の学びの性質を持ち、大学教育の予科ではなく、また、すべての卒業生が大学に進学するわけではない、と言う意見がある。

仮に、高校教育の目的が大学進学の為の準備だとしたら、すべての卒業生は大学に進学する準備を整えることができることになる。中高生の多くが、高等教育への進学を近未来の選択として考慮しているのであれば、高校教育は大学進学の為の準備を目的の本流に据えても何らおかしい事はないのである。高校生の期待が大学教育での成功にあるのなら、そうした教育をすることは、ステークホルダーのニーズに応えることになる。しかし、それは、入学審査

の準備とは必ずしも一致しない。

大学で成功する学生を増やす為には何ができるか。高校教育を全うする事がイコル大学教育の準備をしたことにはならないという現実に向き合うか、ということになる。同時に、入学審査の準備イコル大学教育の準備でもないのである。

アメリカの場合、オレゴン大学のデービッド・コンリー博士たちが行った大学での知識の研究によれば、大学教育の為に良く準備ができている学生の特徴を大学での学習領域毎に探してみると、以下のようである。

1) 英語の領域で成功する学生は、批判的に文章に接し、主題もしくは着想を見分けることができる。彼らは、如何なる場合でも、深い分析に進む前にこうしたことができる。

2) 数学の領域で成功する学生は、文脈から問題を抽出し、問題解明に数学を利用し、文脈に戻って解明方法を説明することができる。

3) 自然科学の領域で成功する学生は、失敗を恐れない。彼らは進んでリスクを負おうとする。彼らは、問題を讀んだ後、どのように対処するかが分からなくても、

すぐには諦めないし、当惑することもない。彼らは、実験が失敗しても、それが理由で単位を失うことにはないと認識している。彼らに必要な準備は、科学的手法の統合と文脈を理解すること、そして、批判的思考力や実地技能である。

4) 第二外国語の領域で成功する学生は、言語における暗示を認識でき、そうした暗示から推測ができる。彼らは、良き推測者であることを学び、常に辞書と関わり、文脈から単語の意味を推測することができる。彼らは、その言語が発展した文化的背景を理解し、正確にコミユニケーションする為に言語を使う。その場合、第一言語の文化的背景理解や使用方法はその良き手本となる。

5) 個人の芸術における卓越性は、この領域において最も革新的な作家たちの作品に対する深い理解と敬意の形成に始まる生涯の探求である。芸術の領域で成功する学生は、学びを通して得ることもあるが、それは、しばしば個々の人間性や個人的シンボルの投影であったりする。彼らは、芸術の生涯学習者であり、同時に参加者であり、技術の獲得や人間の成長をさらに高める為に大学で時間を使うという考えの持ち主である。

さて、6) 社会科学の領域において、大学が学生に何を期待するかを少し詳細に見てみる。

学生は教員が提示した疑問に関心を持つ事がまず必要である。そして、教員が提案した社会的／道徳的問題の複雑さを探りたいという欲求を持つ事が必要である。そこで、教員からその為の術を提供される。仮に彼らがそうした知的関心から距離を置くとすれば、学業はとても困難なものとなる。彼らは、まず、基本的な知識として、歴史学、経済学、地理学、政治科学、社会学について一通り知っていることが重要である。例えば、地理学について言えば、良く準備ができている学生は、世界地図を解説し、説明し、場所を指摘することができるとともに、世界における人口移動の型に通じている。経済学について言えば、成功する学生は、数学の基礎ができており、需要、供給、不足、機会、そして、トレードオフ（交換）の基本的原理が分かっている。政治科学について言えば、成功する学生は、様々な政治的権力の基本的な性質（例えば、民主主義とオリガークシー（寡頭制）の違い）について理解している。世界中の様々な政府の体制（例えば、立憲的な政府と非立憲的な政府の違い）について知っている。

また、統計学について言えば、成功する学生は、データを様々な方法で提示（スキャタープロット、線グラフ、など）できるし、最適な提示手段を見つけられる。そして、統計学上のデータ（標準偏差、レンジ、モードなど）を理解し、実際に使うことができる。更には、カーブフィッティング技法（例えば、メディアンフィット・ラインやリグレーション・ライン）を理解し、様々な応用（例えば、予測）できる。

大衆化、ユニバーサル化と表現される高等教育の拡大と発展を支えるには、「大学生になる」準備ができている高校生を育てることを高校教育の目的の中に加えるとともに、そのスタンダードとベンチマークは高大「教育接続」の文脈の中で管理され、縦の多様化によって、後押しされる必要がある。

六 今後の課題—いわゆる「ブリッジ（掛け橋）」を越えて

今日、高校教育の空洞化が憂慮される一方で、大学進学を目指す若者たちはわれ先に大学教育を受けようと大学進学準備教育に高い関心を示している現実がある。実際に彼らはそうしたプログラムに対して前向きである。しかし、その多くは、高校の出口と大学の入口の掛け橋が主である。

わが国の場合に限って言えば、未だ、それは、アドミッション（狭義の大学入試を含む）の準備教育の域を出てはいないし、学生募集戦略上の工夫の域を出ていないようである。高校教育と大学教育のスタンダードとベンチマークの共同管理の推進とその有効化を巡る是非論は、現代中等教育の適切性の検証を踏まえて、高大「教育接続」プログラム開発の新たな展開を検討する上で重要なヒントになると思われる。

参考文献

1. 田中義郎「第五章・アメリカにおけるカレッジ・プレップの多様化と中等教育の未来—中等教育が支える高等教育の拡大と発展—」pp.五八—六八、『大学ユニバーサル化時代における中等教育の再定義—積み上げ型システムの転換—』（日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（B）（13330180）平成一八年度—平成二〇年度、研究代表者：今井重孝）報告書、二〇〇九年。
2. David T. Conley, *College Knowledge*, Jossey-Bass, 2005
3. Harold S. Wechsler, *Access to Success in the Urban High School—The Middle College Movement*, Teachers College Press, 2001.